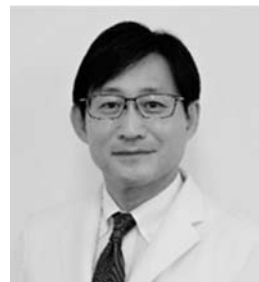


# 見過ごしたくない心電図所見 — 識る・診る・治す —



小川 正浩

福岡大学病院 副病院長・臨床検査部部長

心電図は、オランダの **Einthoven** 博士により100年以上前に創起された検査法ですが、いまだに臨床の最前線で用いられ、その有用性は今更言うまでもありません。この開発により博士はノーベル賞を受賞されましたが、まさにその賞に値する研究開発であったと今現在の状況をもってしても言えるのではないのでしょうか。虚血性心疾患や心不全、また心房細動や期外収縮、病的徐脈など様々な不整脈など医療現場はもとより、現代社会のデジタル化とともにスマートウォッチなど長期間の心電図モニターは広く汎用されるようになり、心電図そのものが広く一般の人々に認識されています。最近では、すべての人を対象とした心電図検定が人気を博すなど、心電図所見を理解し読解することを希望する人が増えています。こうした背景もあり、医師のみならず、検査室で日々の業務や診療で心電図検査を施行する臨床検査技師や看護師は、より習熟した心電学の知識を持つ必要があります。

心電現象をより深く理解するための重要な方策は、実診療における現象や疾病、その経過や治療における心電現象の変化をしっかりと理解し実臨床に生かすことです。つまり、心臓電気生理学的検査における心内電位や心臓超音波検査と比較し、モニターや12誘導などの心電図から心疾患や機能低下の原因、また結果として引き起こされる不整脈などの心電現象を検出し判読し読解すること、今発生している異常やこれから起こるかもしれない異常の予兆を察知することができるかどうかなどです。モニター心電図は、経時的变化や発生頻度が低い発作性不整脈などの記録や解析を可能にすることを長所としています。一方、12誘導心電図は、空間的情報に優れた心筋虚血部位や不整脈発生機序・部位などの重要な情報を得ることが可能で、PCI やカテーテルアブレーションなどの治療に役立ちます。

本講演では、実際の循環器診療において見逃したくない心疾患や不整脈の心電図の特徴的所見など実臨床に役立つ心電情報を解説するポイントを解説し、心電学の理解を深めたいと思います。